



1 はじめに

本講座のねらい 浜名湖の変遷と人びとの暮らし 縄文海進と明応の地震

2 原始(縄文時代)

縄文海進とその後の沖積作用、丸木船を用いた生業、交易、蜷塚人たちの生活

3 古代(奈良・平安時代)

曾許乃御立社と六撰社、舟神輿、真言宗寺院館山寺と行場としての館山 チャート岩塊

4 中世

明応地震(1498)と今切れ 水城ネットワーク 志津城、堀江城、佐久城、野地城、宇津山城

5 近世及び近代初頭

中村家の台頭 今切れ渡し 雁木と石垣 荒井宿と舞坂宿と舟たまり 堀留運河 汽船場

6 まとめ

浜名湖の水運 豊富な内水域 水路を知る - 現状を知る(防災、減災、社会課題)

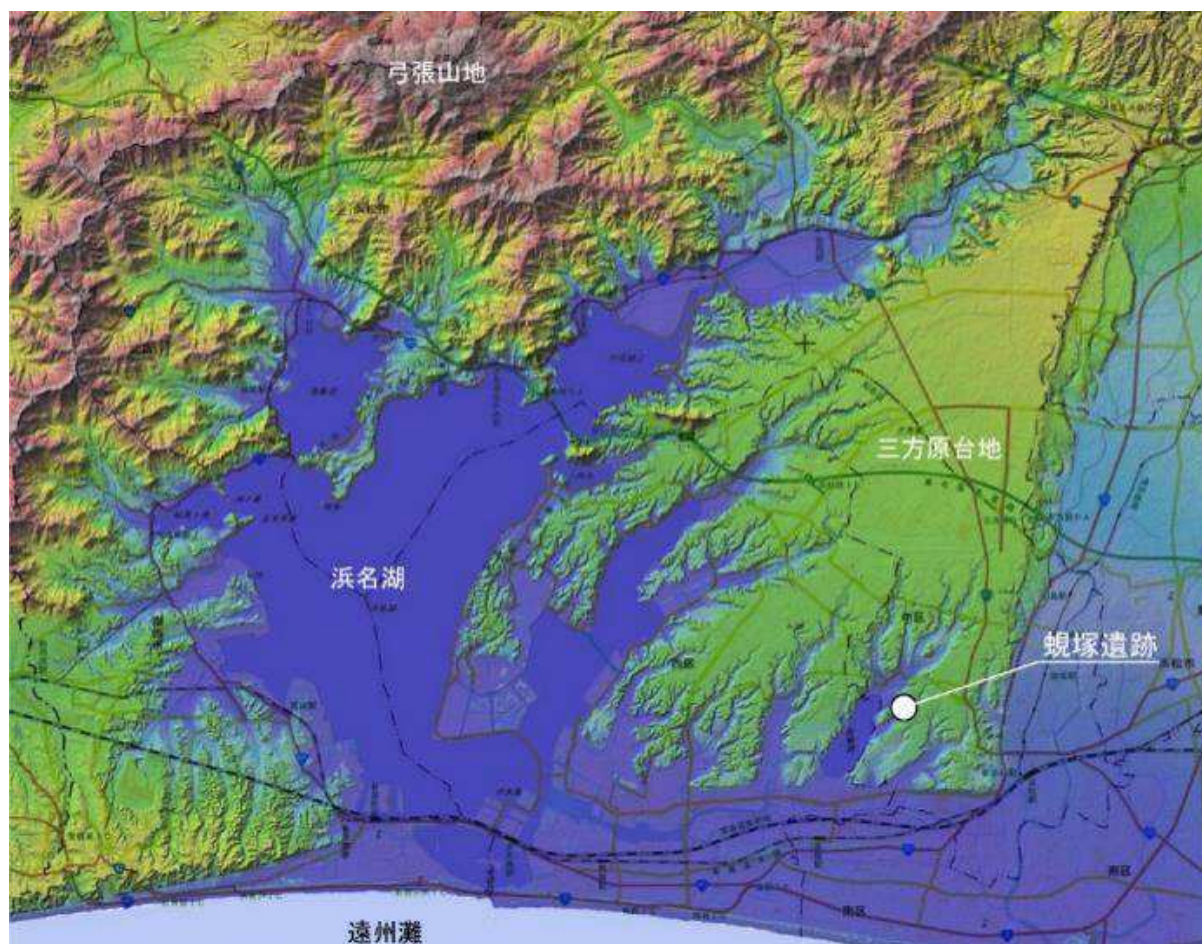


図1 縄文海進期の浜名湖 (小山真人氏作成 浜松市2022『史跡蜷塚遺跡保存活用計画』より)

縄文時代前期(約6000年前)、温暖化が進み平均気温は1～2度ほど高かった。海水面上昇はピークに達し、海岸線は現在よりも内陸に達していたとみられる。なお、蜷塚遺跡の形成は縄文時代後期(約4000年前)にあたり、佐鳴湖の原形がすでにみられる時期に相当する。



図2 縄文時代の丸木舟再現と航海実験（協力：海洋冒険家、鈴木克章氏）

2025年11月、縄文時代後期（約4000年前）の蜷塚遺跡で丸木舟を再現し、展示、実際に佐鳴湖に浮かべて航海実験した。蜷塚遺跡の縄文人は佐鳴湖畔に多くの丸木舟を用意し、漁労に出向くとともに、時には浜名湖を経て外洋にも出向いていたと考えられる。



図3 浜名湖をめぐる古代遺跡

大規模な地盤沈下をもたらした明応の地震（1498年）以前の浜名湖の姿を想定復元したもの。現在の舞阪町から村楠町、雄踏町にかけては、陸化していたことが数多くの湖底遺跡の存在からうかがうことができる。

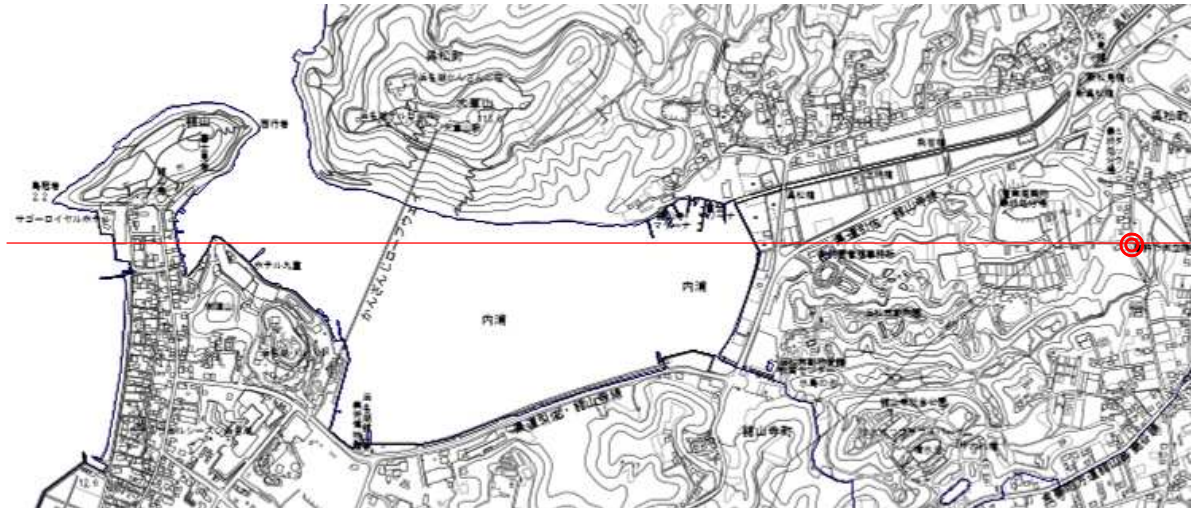


図4 曾許乃御立神社の立地

神社の位置は、内浦を貫く東西方向が意識されていることが分かる。内海環境が類似する「香取の海」との共通性がある。



図5 曾許乃御立神社の詳細

神社境内の詳細。社殿は西向き、浜名湖に向かって開かれている。禊を行う御手洗池は本殿南側の谷中にあり、そこから斜面を上る構造は、鹿島神宮と共通性がある。御船行事が行われる御旅所は、浜名湖方向の参道にある。この神社は東西方向が主軸で、堀江道（館山寺街道）の往来が顕著になった後年、南側の参道が整えられたと推察できる。



図6 曾許乃御立神社の本殿

流造。鹿島神宮本殿とも共通する建築様式である。



図7 曾許乃御立神社の御手洗池

本殿北側にある禊用の池。鹿島神宮のあり方と類似する。

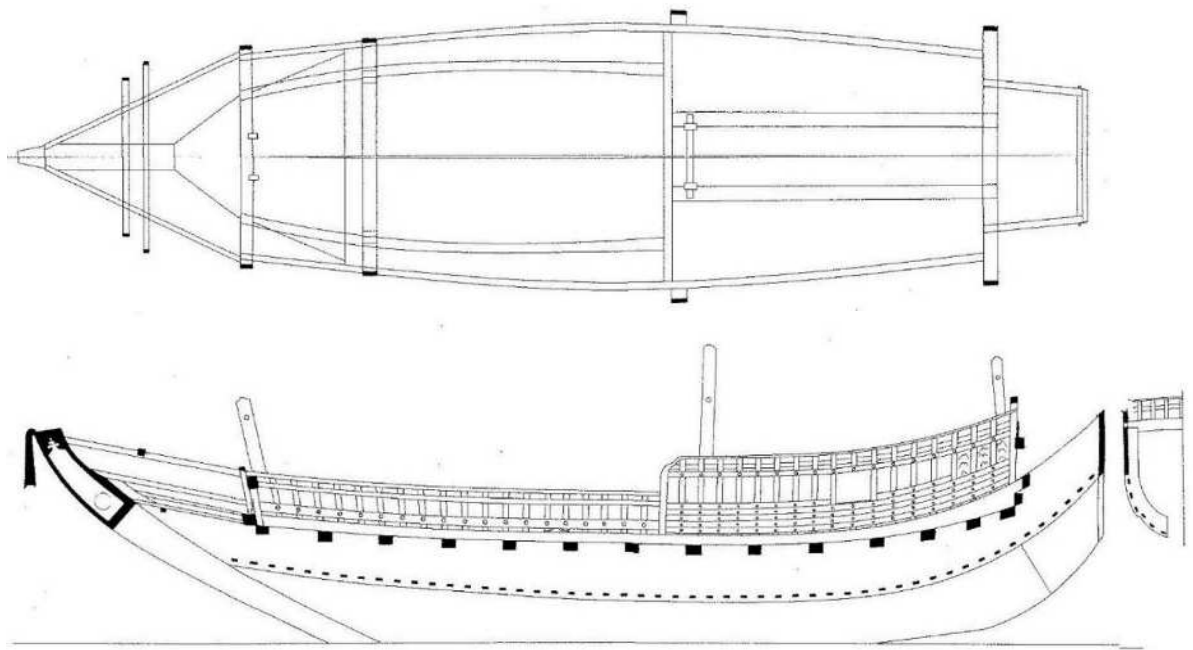


図8 曾許乃御立神社のオミコシブネ（静岡県教育委員会 1998『遠江の御船行事』）
御座船の模型。天明八年（1788）。楠材を用い、表面は漆が塗布される。祭礼ではこの上に小社殿と帆がとりつく。



図9 曾許乃御立神社例大祭時のオミコシブネ
例大祭（10月開催）の際の姿。下面に担ぎ部が渡される。現在は氏子の中学生4人が杵をまとい、神輿を担ぎ、西方にある御旅所まで出向く。かつては御旅所で神楽が奉納されていた。



図10 神輿渡御の様子
猿田彦に導かれた行列に従う体裁で、神輿が御旅所まで渡る



図11 神餅オタカネ
『遠江国風土記伝』（内山真龍 1799）には、氏子が水で溶いた米糠を練った「於多賀禰」を祀ったと記載がある。



図 12 館山のチャート岩盤露頭

館山はチャートの岩塊で出来ており、海岸や山頂に岩盤の露頭がみられる。石材産地とともに、様々な聖地と認識された。



図 13 弘法穴古墳

館山にある7世紀前半の古墳で、チャートの横穴式石室が残る。現在は「穴大師」として崇敬を集める。



図 14 愛宕神社奥の院

愛宕神社の奥の院は、チャートの岩塊が露頭し、修験の行場である。役小角の石像が今も傍に残る。



図 15 館山の行場

館山に至る所に修験の行場がみられる。いずれもチャートでできた奇怪な地形を利用する。



図 16 修験行事(秋葉火まつり)
館山寺は明治期に廃寺となるが、秋葉寺から住職を迎え復興、火祭りを行う。



図 17 館山寺旧阿弥陀堂
現在は、愛宕神社拝殿。館山寺は弘仁元年(810)空海によって開かれたとされる。



図 18 応賀寺(湖西市)阿弥陀座像
浜松市美術館 2021『みほとけのキセキ』より。明治期に館山寺より移動

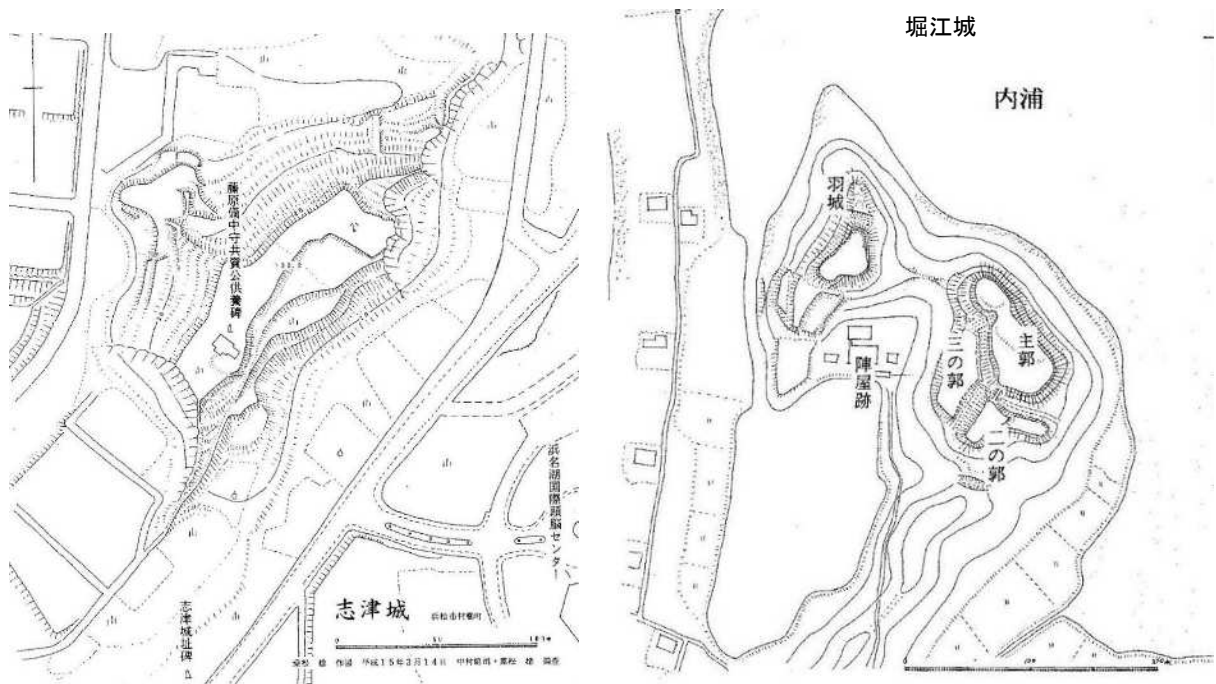


図 19 志津城（左）、堀江城（右）（出典：静岡県古城研究会 2022『静岡県の城跡 中世城郭縄張り図集成（西部・遠江国版）』）
志津城は村櫛に所在する。大澤氏の遠江入部当初の拠点と考えられる。堀江城は現在の遊園地とその西の丘陵に相当する。



図 20 内浦からみた堀江城（北から）
北側の内浦を挟んで対岸の館山から撮影。浜名湖水運と水軍の利用を意識した立地であることが分かる。



図 21 堀江城西堀切の現状（北から）
堀江城の西側には堀切があり、南側の入り江にまわり込むことができた。



図 22 堀江城南側の入り江の現状（南から）
堀江城の南側にあった入り江は、現在も低位面としての広がりが見られる（現在の館山寺温泉バス停付近）。



図 23 堀江陣屋鬼瓦
湖西市新所に移築された堀江陣屋に用いられていた鬼瓦。遊園地内に移設。



図 24 法泉寺山門（湖西市）
明治期、堀江陣屋から移築されたもの。貴重な城郭遺構である。



図 25 法泉寺山門の鬼瓦
大澤家の家紋である茗荷紋がみられる。



図 26 浜名湖東岸域の水域
浜名湖の東岸域は国衆の城郭や有力者の居館を拠点として水運網が発展していた。佐鳴湖に至る「うぶみのわたり」が著名。

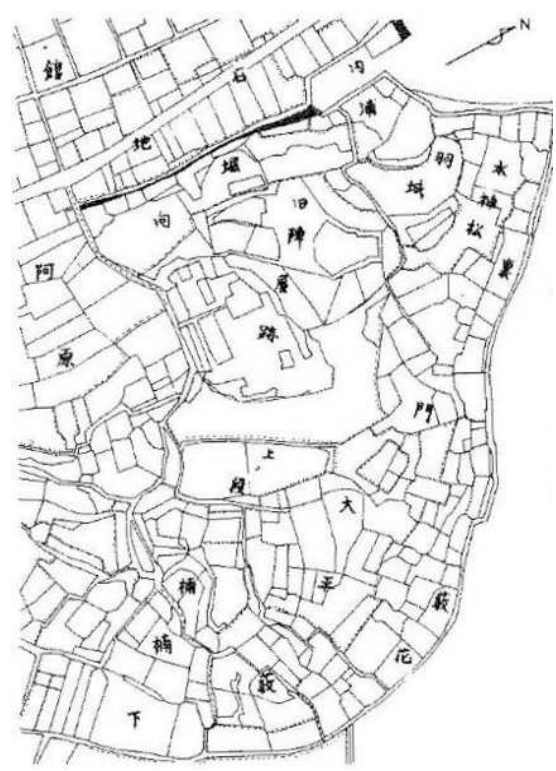


図 27 堀江城の地籍
堀江城の字名の詳細。上ノ段、上平、裏門、羽城、旧陣屋跡といった城郭由来の字名が見いだせる。



図 28 中村家住宅
中村氏は大和国を本貫とする。文明 13 年（1481）今川氏に招かれ遠江に入り、文明 15 年（1483）宇布見に屋敷を構えた。



図 29 江馬家住宅
16 世紀中ごろ江馬秀時が飛騨国から今川氏を頼り遠江入りした。その後、江馬氏は山崎の地に代々屋敷を構えた。



図 30 佐久城の現状

猪鼻湖に突き出た丘陵を利用した浜名氏の居城。湖から船が出入りできるような舟入状の堀を備える。



図 31 堀留航路の旅程と運河の現状

上図は堀留運河現地の案内看板より。堀留運河は明治4年(1871)に完成した。

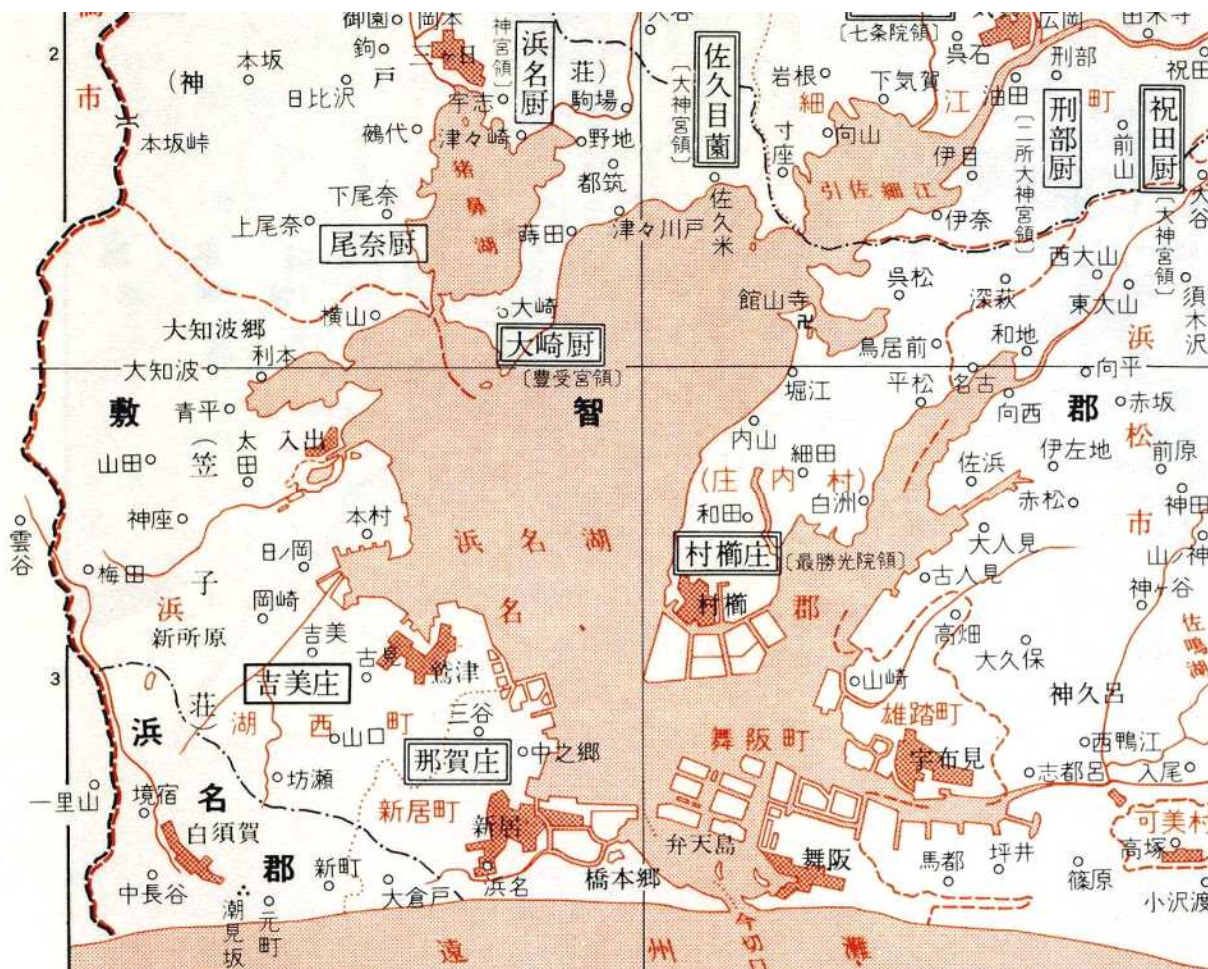


図 32 浜名湖をめぐる荘園と村落 (出典：竹内理三編 1975『荘園分布図上巻』吉川弘文館)

明応地震(1498)以後、浜名湖は外海と直接つながり、汽水湖となった。近年まで水上交通網で繋がっており、人や物資の往来を通じ沿岸地域の結びつきが強かった。